

氏名(本籍)	わた なべ みつ お 渡 辺 光 雄 (神奈川県)		
学位の種類	博 士 (教 育 学)		
学位記番号	博 乙 第 727 号		
学位授与年月日	平成 4 年 1 月 31 日		
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当		
審査研究科	教 育 学 研 究 科		
学位論文題目	W. クラフキの教授学構想に基づく「二面的開示」に関する研究		
主査	筑波大学教授	長谷川	栄
副査	筑波大学教授	教育学博士	天 野 正 治
副査	筑波大学教授	佐々木	俊 介
副査	筑波大学教授	教育学博士	杉 原 一 昭
副査	筑波大学助教授	斉 藤	佐 和
副査	筑波大学教授	教育学博士	成 田 十 次 郎

論 文 の 要 旨

(1) 本論文の構成

本論文は序章、本論 5 章、終章より構成され、本文 321 頁、補論 66 頁、引用文献 13 頁、資料 19 頁より成る。

(2) 本論文の目的と方法

ドイツの伝統的教授学の「人間形成」概念として今日取り上げられる代表的なものは、クラフキ (W. Klafki) の提起した「二面的開示」の概念である。これは、人間と物的・精神的現実との相互作用において現実が人間に対して開くことが同時に人間もその現実に対して開くことになる、ということの説明したものである。この概念は、教育の実際の事柄との関係で意義づけられていなかった。

この意義づけを行うために、本研究の目的は、第一に「二面的開示」の概念を抽象的・概念的なものではなく、一定の思考様式に支えられた中身の伴う存在であることを論証すること、第二にその概念の存在が教育の実際の事柄に対して価値づけられることを論証することである。

この論証をするために、次の四つの説明方法をとる。第一に、問題となる概念が第三者に認められる認識基盤に基づいて提起されたものであること、第二に、その概念が関連の学問分野で肯定的に承認された非恣意的なものであること、第三に、その概念が確固とした思考様式によって支えられていること、第四にその概念が教育の実際の事柄に貢献しうること、これら四つを確認すること

である。第一から第三までの確認は文献資料の解釈によって行われ、第四の確認はその解釈の他に実証資料によっても行われる。

(3) 研究結果の概要

第1章は、西ドイツにおける1950年代から1970年代にかけての教授学の動向を把握しながら、クラフキの教授学の学問的立場を明らかにする。彼の教授学は、解釈学的研究を基本的立場とし、初めは精神科学を背景にした実践的認識関心に基づいていたが、フランクフルト学派の批判社会学の「自己解放的認識関心」の影響を受けるものの、基本的立場の変更は認められない。「人間形成」における「二面的開示」の概念は、1950年代末の解釈学的研究の所産として実践的認識関心に基づいて提起されたものである。ここで、第一と第二の確認が行われる。

第2章は、「二面的開示」の概念を支える思考様式がドイツ的な「回帰」思考であることを、ドイツ精神史の脈絡の中で論証しようと試みる。第三の確認がここで行われる。クラフキの「二面的開示」の概念は、フレーベル (F. Froebel) の「回帰」思考を継承し、これを支えにしたものである。ここでいう「回帰」思考は、外的なものが内的なものから導かれ、内的なものを外的なものに見いだすという、内と外との相互の逆方向の推論を行う思考である。この「回帰」思考はフレーベルに影響を与えたアルント (E. M. Arndt) の教育思想にも見出される。さらに、ドイツのロマン主義のパウル (J. Paul) の教育思想にも、「回帰」思考が重視されていることが明らかにされる。

第3章は、「回帰」思考に支えられる人間形成の考え方がクラフキの教授学においてどのように「二面的開示」にまとめられるのかを考察し、その概念を規定する。まず、クラフキの教授学は精神科学的教授学から構成的批判教授学へと変化するが、人間形成における「二面的開示」の考えは一貫していたことが示される。次に、この「二面的開示」を教授学の具体的展開において考察し、授業者の行為には、授業者が生徒の側から教材へ向けての解釈と教材の側から生徒へ向けての解釈が見られる。この二重の解釈によって、「二面的開示」が考えられている。これは、クラフキの弁証法的思考に基づいたものであり、しかも実質陶冶と形式陶冶との対立を統合するものである。こうして「二面的開示」は、客観的面で現実の一般的・本質的内容が明らかにされると共に、主観的面で精神的範疇が身につけられることを示すことになる。

第4章は、「二面的開示」の概念が教育の問題を解釈するとき方向性を与える意義をもつことを論証する。まず、クラフキが積極的に関わった西ドイツの学校改革の面について、「統合的総合制学校」の成立の基本原理の根底には、「二面的開示」におけるダイナミックな能力の考え方が据えられていることが解釈される。次に、教材構成の面について物理教材の「範例的なもの」と生物教材の「類型的なもの」とが検討され、そこで「二面的開示」が方向性を与える働きをしていることが示される。さらに、クラフキの教授学の枠を越えて授業コミュニケーションの解釈にも眼が向けられる。授業者と学習者の間のコミュニケーションは、意味内容の「表現」と「了解」という二重性において把握することができる。ここにも、「二面的開示」の事象が見出されると解釈する。

第5章は、クラフキが否定的に関わった情報論的教授学の授業モデルにも、「二面的開示」の概念がその改善に役立つ、ということを実証しようとする。情報論的教授学は授業モデルとして「制御

回路モデル」を示したが、その改善点は「学習システム」の「出力量」に、S-P表の示す学習者集団の平均正答率や注意係数や差異係数、IRS (Item Relational Structure) グラフの示す項目順序係数、筆者の考案したFIRS (Fourfold-based Item Relational Structure) グラフの示す系列化情報を取り入れることである。ここでは、「二面的開示」の客観的側面の一般的なものは授業者の意図と解釈され、主観的側面の了解の状態が能力と解釈されて、授業の評価技法に生かされる。ここで、採録した実際の授業に基づいて評価技法が扱われる。

第4章と第5章において、第四の確認が行われる。

こうして「二面的開示」という概念は、一方でその源をドイツの教育思想史に遡及してそれがドイツ的な「回帰」思考に支えられていること、他方では教育の現実的事柄に関して「二面的開示」が価値をもっていることが、結論として示される。

審 査 の 要 旨

本論文は、クラフキの教授学構想に示された基本的概念「二面的開示」を取り上げて、その人間形成上の意義を明らかにして、その思考的根源を探究し、フレーベル、アルント、パウルの教育思想におけるドイツ的な「回帰」思考に基づいていることを論証する。この「回帰」思考がドイツ的であるという解釈には妥当性の問題が残るにしても、「二面的開示」を「回帰」思考に遡及する解釈はわが国でもドイツでも指摘されてこなかったことで、独自の点である。

そして、「二面的開示」の概念は学校改革における能力観、教材構成、授業コミュニケーションの分析にも、教育現実をとらえる思考の枠組みとして価値があることが論証される。その上、情報論的教授学の授業モデルにもそれが役立つことが、授業の実証的資料に基づいて証明される。クラフキの教授学の枠内での解釈にとどまらずに、その枠外の現実の教授学的問題にも解釈を広げて「二面的開示」の概念が有効性を発揮することを示したことは、本論文の特徴であると共に、大きく評価することのできる点である。

本論文は、筆者の長年にわたる研究の成果としてまとめられたものである。クラフキの教授学の解釈は的確であり、論の構成は堅固で確実であり、緻密な論理で表現されている。総体として、教授学の基礎的研究に貢献する論文として評価することができる。

よって、著者は博士（教育学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。